



「防災塾・だるま」通信

2021年8月号

発行者 防災塾・だるま



2021年7月27日 第182回「防災まちづくり談義の会」 リモート併用意見交換の様相

CONTENTS

- 1 塾長挨拶 東日本大震災10年の重みを「新時代」の防災まちづくりに
～小さな命の意味を考える会代表 佐藤敏郎氏との対談から～ 鷺山龍太郎 P2
- 2 講演要旨 「学校にいるときも、家にいるときも災害から守れる学校とまちづくり」 鷺山龍太郎 P3
- 3 第182回「防災まちづくり談義の会」レポート・各サロン意見交換集約 田中 晃 P5
- 4 7月定例会議事録 樋口誠 P10
- 5 「防災塾・だるま」談義の会・サロン別打合せ 樋口誠 P12
- 6 横浜市緑区白山見学会&勉強会報告書 田中 晃 P14
- 7 名誉塾長の部屋 第2回「新しい研究の発見と進路の決定」 荏本孝久 P18
- 8 第183回 防災まちづくり談義の会（Aサロン主催） チラシ
「震度6強の首都直下地震に備えるための耐震化推進」 田中栄治 P20
- 9 9月17日「防災塾・だるま」定例会協議事項（要旨） 理事会 P21



本紙は原則として、談義の会実施の次の月に発行する予定です。

東日本大震災10年の重みを「新時代」の防災まちづくりに ～小さな命の意味を考える会代表 佐藤敏郎氏との対談から～

塾長 鷲山龍太郎

7月27日の第182回防災まちづくり談義の会では、小さな命の意味を考える会代表、佐藤敏郎氏のご講演、鷲山の実践がその問いかけへの答えになっているかとの提案、そして荏本孝久名誉塾長のコーディネートによる対談が実現しました。

佐藤敏郎氏が大川小学校震災遺構での語り部として10年間にわたり、被災の現実、失われた命とその未来の重みを訪れる多くの人々に伝え、また全国的にも発信されてきたお取組に心より敬意を表したいと思います。また、この度、「防災塾・だるま」の講演会にリモートでご登壇いただいたことに深く感謝申し上げます。震災後10年経って、新任の教員に研修として現地案内をされ、お嬢様が生きていれば、この新任教員と同じ年というお話に、生命と人の未来の重みを感じずにはいられませんでした。

今回の談義の会は東日本大震災10年の今年、その教訓を生かした学校防災、防災まちづくりは何が前進し、何が進んでいないのか、では、「防災塾・だるま」として何を提案し、社会に発信していくべきかを考える貴重な機会と位置づけたいと思います。会員の皆様と、協議を深めていきたいと思います。

「防災の新時代」をひらく具体策「地区防災計画」という理念

気候変動による災害の激甚化、コロナ禍、一方で今回の談義の会のようにリモートでの対話ができるようになるなど人との繋がり方が変わったこと。また、熱海の土砂災害や白山の土砂災害、東北の復興における行政の一方的な対策などの「合成の誤謬」(佐藤孝治名誉教授ご講演会から)に見るように、市民と行政の連携、防災対策への市民の参画などが大きな課題として浮き彫りになってきたように思います。そこで災害と防災をめぐる状況が大きく変化した東日本大震災10年の今、私はこの局面を「防災の新時代」と呼びたいと思います。そして、自助・共助・公助の連携と統合を推進し、「防災まちづくり」を実現する決め手は、東日本大震災後、災害対策基本法に新設された「地区防災計画」の普及推進ではないかと思えます。183回の談義の会は「耐震化の推進」にて、「共助の力で個人の耐震化を促すことができるか」について、184回は、「共助による自助への防災教育」を柱に、議論を進められるとよいと思います。いずれも、共通理解の構築がテーマで、それを明文化した「地区防災計画」に通じるものがあるように考えます。みなさんと議論したいところです。ぜひご一考ください。また、まずはご自身が住む地域で防災への共通理解を明文化して共有、運用していく試みをイメージしていただければと思います。

(余談) 朝ドラ「お帰りモネ」に見る「東日本大震災10年」の人々の生き方に注目

朝ドラを毎日見る身分となり、「まんぷく」「エール」などを楽しみ、また勉強になりました。今の「お帰りモネ」は東日本大震災に始まるドラマで、震災の描写はかなり間接的でしたが、震災で家族や人生を失った人々の状況や苦しみなどがジワジワと描かれてきました。

主人公の島育ちの若い女性、百音(モネ)は震災の当日は本土にいて、大変な体験をした家族や友人に対して、「自分は何もできなかった。」という負い目から、人の命を救えるために役立てる人間になりたいと思う。様々な人々との出会いの中で、「気象予報士」を目指し、20歳で資格を取得、上京して気象予報会社に入社。気象予報と人の人生の関わりの中で成長しています。防災・気象・環境・人それぞれの復興など、多くのテーマが流れており、なかなか奥深いドラマで、今後の展開が楽しみです。

「学校にいるときも、家にいるときも災害から守れる学校とまちづくり」

「防災塾・だるま」 塾長 鷲山龍太郎

1 今回の講演会設定の動機

東日本大震災10年の今年、自分が関わった学校と学区の防災まちづくりについて [学術論文の公開](https://www.jsnds.org/ssk/ssk_40_2_000_1.pdf)
https://www.jsnds.org/ssk/ssk_40_2_000_1.pdf、「防災まちづくり大賞」受賞
https://shin-yoko.net/2021/03/31/futoo_elementary_school2021/など一定の評価を得られた。そこで、大川小学校の語り部として深い思いをもって活動を続けている佐藤敏郎氏と対談したかった。私の実践は佐藤氏の問いに対して「答え」になっているかを聞いたかった。そこから、本会の本年度目標「災害克服に向けて実現したい自助・共助・公助連携・新課題対応力の抜本的強化」に向けて、未来の災害を克服する防災教育と防災まちづくりの具体像を提案するのが目的である。

2 佐藤敏郎氏のご講演を受けて

佐藤氏の現地を案内する動画、避難の実態、被災の実態を知って、当時の学校で想定マニュアルも共有されていなかったことなどを改めて理解することができた。住民が学校に協力的で実により地域社会であったとのこと。そこで私の関心は、そのよい地域で「防災」「津波避難」「子どもたちの津波からの避難場所」という議論が学校、保護者、住民、行政を交えてされたことがあったのかということであった。

[仙台高裁判決主文](https://www.courts.go.jp/app/files/hanrei_jp/735/087735_hanrei.pdf)https://www.courts.go.jp/app/files/hanrei_jp/735/087735_hanrei.pdf (特にP133, 134)では、学校保健安全法30条に基づき、校長は「釜谷地区には津波は来ないという釜谷地区の住民の認識が根拠を欠くものであることを伝え、説得し、その認識を改めさせ(中略)調整を図るべき義務があったというべきである。」(主文)を判決の根拠にしている。学校教員も、行政の一員なので、防災は仕事の一部。防災のプロでなければならぬという判決に、十年前の私は同罪になってしまうが、今は頷ける。

3 防災まちづくりの未来像

・問題なのは、津波の避難場所について学校と住民が真剣に協議したのは、「空白の50分」だったということである。在校時間帯については、仙台高裁の判決のとおりだと思うが、「帰宅後」の津波では(桁が違う数の子どもが犠牲になったと思われるが)誰の責任なのか?もちろん子ども本人と親の責任ということになるが、行政、学校(公助)も地域(共助)も、保護者(自助)もその土地の災害リスクについて、一致して「防災教育」をすべきであろう。

・北綱島小、太尾小学区の実践では、学校だけでなく、家庭、地域にいる時間の災害を、連携してカバーする取り組みである。「防災まちづくり協議会」の役割を「学校運営協議会」が担っている。明文化したマニュアルなど文書を共有しているので、持続、発展できることをある程度実証できたと思う。

・この教訓と実践を生かして、全国の様々な地域で、どこも高齢化が進む中、予測して回避できたはずの災害で命を落とす被害を繰り返さないためには、災害対策基本法等、法的整備によるルール化が必要であろう。

4 結論「地区防災計画策定義務化(行政の支援義務)」構想の提言(まず、「防災塾・だるま」役員の皆様へ)

(1) 防災地区指定義務 「地域防災計画」の策定を義務付けられている自治体の地域防災計画において、全地域を地域の実情に応じて、漏れなく「防災地区」に区割の指定をする。

(2) 地区防災計画策定義務 指定された防災地区において、「地区防災計画」を行政・学校職員の支援(鷲山がやっていたこと)により住民主体で策定。災害リスク、事前対策、応急対策、避難・在宅避難対策を明文化して運用。(行政・学校の地区防災担当者を「防災まちづくりコーディネーター」に育成が必要)

(3) 「防災まちづくり協議会」 定例的に「行政の音頭」で開催し、地域の自治会等、マンション、学校、施設、事業所代表が参加し、住民主体の参画と連携づくりを推進。

・ [地区防災計画](http://www.bousai.go.jp/kyoiku/chikubousai/pdf/pamphlet.pdf) <http://www.bousai.go.jp/kyoiku/chikubousai/pdf/pamphlet.pdf> は、[災害対策基本法第42条](#)

に定められて内閣府からも推奨されているが、「住民が提案してきたら、自治体の地域防災計画（同法 40 条）に組み込んであげてもいいよ。」という上から目線の法律になっている。[日本防災士会 http://www.bousaisikai.jp/chikubo/](http://www.bousaisikai.jp/chikubo/)はこの推進を活動方針の第一にしている。[さいたま市のように積極的に推進している自治体もある。内閣府のライブラリ http://www.bousai.go.jp/kyoiku/chikubousai/chikubo/chikubo/index.html](http://www.bousai.go.jp/kyoiku/chikubousai/chikubo/chikubo/index.html)もある。横浜市は登録0である。

・鷺山としては「防災塾・だるま」の今後の活動方針として、日本防災士会とも連携して「地区防災計画策定推進」を射程に置いて議論することを提案したい。これが連携・参画による「新時代の防災まちづくり」の鍵だと考える。「地区防災計画」のイメージ→[最近保土ヶ谷区の防災講演で鷺山が例として作成したイメージ http://mirai-bousai.net/id-13.pdf](http://mirai-bousai.net/id-13.pdf)

講演要旨 2021年7月27日

「学校にいるときも、家にいるときも災害から守れる学校とまちづくり」代表的スライド

本日の提案骨子

学校にいるときも、家にいるときも
災害から守れる学校とまちづくり

- ・「在校時」災害から子どもを守る職員の育成と学校づくり
- ・「帰宅後」の子どもを守る地域社会（家庭）づくり
- ・「自助・共助・公助」の統合をめざして
 - 全国防災地区化と地区防災計画作成義務化（行政支援義務）
 - 「防災まちづくり協議会」による地区防災推進提言書はHP「未来防災」にあります。

2011年5月2日
の避難訓練は
子ども職員も立派！
しかし、シミュール（現実超越）！
学校だけで地震が起き、収束していく訓練。
これで子どもたちを守れたのか？
地域の人は？保護者はどうなる？

参観していた保護者の問い
「校長先生！家にいるときに地震が起きたら子どもや私はどうしたらいいんですか？教えてください！」
当時の私は答えられなかった！

大川小学校の事案と
これが鷺山が地域・保護者・学校連携防災に取組む拍車となった。

校長は地域の避難行動を調整する義務がある？

（校長は）上記義務を遺漏なく履行するために、危機管理マニュアルを作成する過程において、釜谷地区には津波は来ないという釜谷地区の住民の認識が根拠を欠くものであることを伝え、説得し、その認識を改めさせた上で、在籍児童の避難行動と釜谷地区住民の避難行動が整合的なものとなるよう調整を図るべき義務があったというべきである。

児童帰宅後の被災は？責任は誰に？

(仙台高等裁判所判決本文)

防災まちづくりの鍵は
「連携と参画」

「連携」とは

- ・ゴール（理念・目標）の共有
- ・役割分担と各任務の明確化
- ・アクションプランの共有とPDCAサイクル

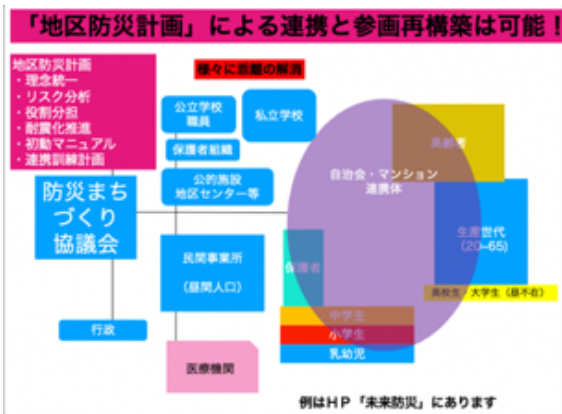
地区防災計画の作成で具体化
はじめはA4数枚の簡単なものからあるとないは大違い

「防災まちづくり協議会」で地区防災計画を共通理解化運用

「参画」とは

- ・誰もが「主体」である
- ・意見の反映ができる
- ・自己有用感がある

全国的な標準化には法的整備？



総合的防災まちづくり構想

鷺山の提言

- ・災害対策基本法の改定「総合的学区防災連携推進法」策定
- ・自治体の「防災まちづくり条例」策定
- ・学区（連合自治会）等を単位とした地区防災計画と防災組織化を義務化
- ・学区防災計画に基づく、学区にあるすべての自治会等、医療機関、事業所、施設の連携
- ・学区防災計画に基づく、防災マニュアルと住民各層への防災教育、連携防災訓練の充実

日時：2021年7月27日(火) 14:00-15:45 場所：横浜市青少年育成センター 第1研修室
 ◆主催：防災塾・だるま 総括運営：鷲山 総合司会：山田(美) 記録：田中(晃)
 ◆談義の会参加者：33名(会場20名(内一般2名)、ZOOM:13名) (敬称略)
 話題：「災害を克服できる防災まちづくり・防災教育」の将来像を考える
 講師：小さな命の意味を考える会代表 佐藤 敏郎氏 (元石巻市立大川小学校保護者)
 公助連携力向上サロンリーダー 鷲山龍太郎氏 (防災塾・だるま塾長)
 コーディネーター 荏本 孝久氏 (神奈川大学教授、防災塾・だるま名誉塾長)

司会の山田さん：Zoomで参加される佐藤さんをお迎えし、厳しい被災地の様子をお聞きし、未来への論議を重ねてほしい。

開会挨拶

荏本名誉塾長：風通しの良さで課題を共有し、具体的な方向性を活発に論議願いたい。

鷲山塾長：佐藤講師から被災地の様子をZoomでお聞きし、課題を理解・検討したい。

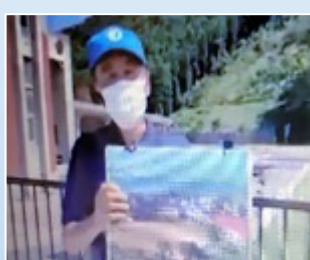


第1部 佐藤敏郎氏講演 「あの日失われた命に意味づけをするのは、生かされた私たちの役割」

- 被災時の状況**：避難途中で津波に襲われ、次女が被災した。中学校の制服が出来た日だった。生徒74名、教師10名が犠牲になった。道路がなく船で駆け付けた時の様子を説明後、大川小学校からの動画で、構内の様子、2階の天井の3.7mの津波の跡、津波に襲われた避難通路、津波が遡上した山道等の説明があった。
- この10年の活動**：「未来を拓く」が大川小学校の合言葉で、我が子の死を無駄にしない。救えなかった命を仕方ないとせず「あの日何があったか真実を知りたい」と、教訓を未来に生かしてほしいと、この10年活動し、積み上げ、今ではやっと全体像が見えてきた。
 - ・校庭では57分間意思決定がされなかった。防災無線、ラジオでの津波の発生と避難の呼びかけ、保護者からの情報提供もあった。消防団や広報車が避難を呼びかけ、スクールバスも待機したが、判断と行動が伴わなかった。児童から「裏山に逃げよう」の声もあったが「勝手な行動はダメ」と引き戻された。
 - ・橋のたもとに向い動き出し、フェンスを越えた道路で8~9mの波に襲われ、子どもと先生の命を奪った。
 - ・普段なら簡単に登れる山への避難が出来なかった。危険を判断できないパニックが起きてしまった。生死が分かる時の判断と行動が大事だ。大量の文書ではなく普段からの準備が必要だ。
 - ・学校に協力的な地域であったが、津波避難所などについて、学校と地域で話し合われる機会も、呼びかけもなかった。ハザードマップは責任逃れ、信用できない。津波は学校まで届かないとされ、浸水地域に避難所もある。
 - ・石巻市教委から新任校長研修会や初任者の研修会の講師依頼されるようになった。判決も含め、10年の活動の積み重ねと変化を感じる。現職校長には同窓生も多く、課題を理解してもらえたと思う。初任者は、娘が生きていれば同い年である。
- 未来に向けて**：防災は子どもが「ただいま」を必ず言える環境作りだ。人の為に行うもので、「恐怖を与える」「家族の悲劇がある」から「助かる未来があり、希望あるハッピーエンド」を目指している。講演活動のほか、「被災した子ども」が「被災しなかった子ども」と交流して伝承する活動をしている。
- 参考資料・小さな命の意味を考える会** http://311chiisanainochi.org/?page_id=5



大川小学校震災遺構



遺構を案内する佐藤氏



裏山の津波到達点



児童たちのランドセル

第2部 鷲山氏講演 ★教訓を生かした防災まちづくりはかなり実現できる。法的整備で全国標準に

●被災時の状況：震災時は校長会で北綱島小学校には不在、大川小学校の事故に衝撃を受けた。なお、関東大震災では横浜で2万6千人死亡、内小学生903人が死亡、また出火してまちが焼失した。



●この10年の活動：・学校の危機管理マニュアルを再構築することとし、着任した北綱島小学校と次の太尾小学校で安全確保義務を果たすため、防災教育の在り方と防災まちづくりに取り組んだ。特に小学生は生活時間の1/6が学校で、5/6が地域であり、「学校でも家庭でも生き抜く力」の育成が大事とした。保護者からも「家で地震に遭ったらどうしたらよいか？」の疑問が投げられたことが、この10年間の原点となっている。

・まず自分が防災を学び、教える立場になった。さらに教育者としての義務とは何か、共助とは何かを、普段から話し合い積み上げた。学校の横断的防災カリキュラムを構築し、職員とも共通理解を大切にしてチームとして防災を含む学校運営ができることを目指した。

・地域との「連携と参画」をテーマに地域連携に努めた。まちづくり協議会との話し合いを積み上げマンションにも声掛けて、2000人防災訓練となった。簡易な地域の防災マニュアルを学校運営協議会で共有、地域、保護者と地域の役割を決めて蓄積してきた。子どもは訓練に参加して、連携して活動する大人たちの背中を見て育つ。

●未来に向かって：今回の講座では「自助、共助、公助で連携できる防災教育と防災まちづくり」の連携を模索した。さらに鷲山講師から「地区防災計画」で学校が地域社会に参加して変わっていくよう、「総合的防災まちづくり構想」が提言された。

(添付1「学校にいるときも、家にいるときも災害から守れる学校とまちづくり」本文と代表的スライド)

●参考資料 ・北綱島小学校の事例 https://www.jsnds.org/ssk/ssk_40_2_000_1.pdf

・太尾小学区の紹介記事 https://shin-yoko.net/2021/03/31/futoo_elementary_school2021/

・防災士 鷲山龍太郎 未来防災 NET mirai-bousai.net

■参加者の主な意見

・学ぶだけの教育は子ども達が危ない。「命を守る」ことを「自分で判断し行動」できる防災教育が最も大切で「横並び主義」「マニュアル遵守」の教育の現状を改善していくことが最も大切と考える。

・津波は来ないと言われて被災、ハザードマップは信用できないことが教訓だ。強く世の中に訴えていくべきだ。

・東京には洪水マップがあるが、津波は配慮されていないことが分かった。

■まとめ 荏本コーディネーター

・震災後3回訪問している。今回佐藤講師の話を押聴して、体制の問題がないか、もう少し手掛けていればと思いました。一方鷲山講師は地域で子供や学校を守る体制作りの話で、参考になった。



■総括：今回の談義の会は、わずか100分程度で、釜石の大川小学校で起きた津波被災とこの10年、公助連携力向上サロンからは学校運営の再構築とまちづくり、さらに未来構想と複数の5つのテーマが報告され、サロン活動の行く先の骨格が提案されました。アンケート添付2で意見が出ています。今後は事前に参加者が概要を理解の上参加し、論議して吸収し、各サロンとの連携を深めることが期待されます。(記録 田中晃)

●次回(第183回)案内 (会場参加+ZOOM参加)

・日時：2021年9月17日(金) 13:15~16:45 チラシ14時

・話題：Aサロン代表主催「震度6強の首都直下地震に備えるための耐震化推進」

・講師：防災塾・だるま 副塾長 田中栄治氏

・会場：横浜市青少年育成センター 第1研修室

塾長総括感想

談義の会は、実に深い内容でしたが、荏本先生のまどめで深められたと思います。何を目指した談義の会なのか、「目標」を役員の皆様とも、当日の会員の皆様とももっと共有できるようにオリエンテーションが必要かもしれません。やりっぱなしではなく、一步一步目標に向かって前進したいので。本年度の目標は次のとおりです。常にこれを皆で念頭に活動したいところです。それが「連携」の基盤です。

「災害克服に向けて実現したい自助・共助・公助連携・新課題対応力の抜本的強化」

～東日本大震災 10 年、阪神淡路大震災四半世紀、関東大震災百年、最近の風水害や複合災害の 教訓は生かされ、対策は実現されているか?新たな災害課題も視野に、自助、共助、公助統合による防災・減災力の抜本的改善強化を展望する～

大川小学校で起きたことについては、仙台高裁主文に確定されたので、問題は、仙台高裁の判決「校長は事前に住民を説得してでも地域と避難計画を構築すべきだった。」への「答え」を私は皆さんと考えたかったところです。

私は、「地区防災計画をツールとして、全国津浦浦まで「防災地区」を定め、行政等が支援して策定を推進すること」がその答えだと考えています。2018年夏季シンポジウムの「一般化は？」の答えとして考え着的なことです。

「地区防災計画」は「防災塾・だるま」の中ではあまり聞かれない言葉です。

しかし、これからの防災まちづくりにおいては核となるツールであろうと思います。

「防災まちづくりコーディネーター」とは、「地区防災計画」を「参画と連携」で構築できる人材

- ・ 原案を立案
- ・ ファシリテーションで組織と関係諸機関の共通理解と連携を確立
- ・ アクションプランで計画を実行
- ・ PDCA サイクルで適正化

ができる人材であると思います。

役員の皆様は守備範囲はそれぞれでも、皆様この力をおもちの方々と思います。

講演要旨を添付します。

「地区防災計画推進」については、今後皆さんに提案していきたいと思いますのでリンクの資料をはじめ、事例集等研究していただければと願います。

各グループ各委員の感想

佐藤氏講演 「あの日失われた命に意味づけをするのは。活かされた私たちの役割」

●佐藤講師の話は震災遺構となった大川小学校の現地のレポート報告もあり 10 年前の先生と生徒の尊い命を奪った状況を再確認できた。(B サロン)

<津波への対応>

●津波避難に関しての教訓になった。(A サロン)

●津波ハザードマップの問題点を教えてくれた(安全情報ではない)(A サロン)

だからと言って水平避難はどこまで逃げればよいか不明

●浸水エリアの小学校は津波の避難訓練をきちんとされているが、浸水エリアぎりぎり外れている小

●学校はほとんど津波避難訓練がされていない。(A サロン)

→どういうことをしていたら助けられたのかしら。

校長が在席していたら。避難訓練をしていたら。防災マニュアルがあったら

●あの日の津波を想定できることができなかった。これからの想定の基本が変わった。(C サロン)

津波や土砂災害、火災に限らず、害時パニックになった時の自分を考えてみたい。

●橋があったために、流れてきた瓦礫や流木がせき止められて、氾濫につながった。今後、ハザードマップを作成する際には、あらゆる可能を考慮すべきだ。(D サロン)

<学校防災>

●どうすれば助かったか。「山は命を救わない。」前例のない事態にどう向きあうか。「判断と行動」が命を救う。という佐藤講師の言葉に重みを感じた。(B サロン)

●佐藤講師の講義で「この犠牲を仕方なかったことにしない、無駄にしない」という言葉があったが、それには校長不在で校庭にとどまった「空白の50分間」経緯を明らかにしなくてはならないと思う。(B サロン)

●学校の体制が問題だったのではないか。(C サロン)

* 近隣の人たちも、津波が来るから早く逃げなさいと言いに来た人もいた。この時逃げなかった人が津波に呑みこまれた。早い判断が大切。

* 大災害が起きるとパニックになる。日頃から災害を想定して備えをする必要がある。

<もっと聞きたかった>

●石巻教育委員会の生き残った教師や生徒への聞きとり調査報告のあいまいさや文部省が主導した第三者委員会の件、裁判についても、もっと講師に時間をとってお聞きしたかった。

●被災地の釜谷地区では大川小学校以外の地域の住民の犠牲者も多かった。(B サロン)

「釜石の奇跡」(生徒無事避難)と「鶴住居防災センターの悲劇」の事態もあり石巻市の具体的なこれからの防災教育と地域の住民と一体となった防災対策についても突っ込んで講師に質問をした上で理想の「学区連携防災構想」提案に繋げてほしかった。

<継承>

●家族で大川小に行った時のことを思い出しながら聞きました。分かりやすくシンプルで心にしみました。(C サロン)

防災は、地味に聞こえるがとても大切で、大変なことだと言いつける必要性を考えた。

<総合的まちづくり構想>

●地区で学校・地域住民・行政で、津波の避難場所づくりなどを話し合っていなかった。それはどの地域の現状として言えることだが、地区で「防災まちづくり協議会」を開催するシステムや明文化した「地区防災計画」を策定、運用していく必要がある。(鷲山)

●チャットにあった大川伝承がダウンロードできるようですので、じっくり見ようと思います。(C サロン)

●実体験に勝るものはない。現地に行って、見て、被災した人の話を聞く事が大切だ。(D サロン)

●「判断し・行動できる子どもを育てる」という点に共感した。(D サロン)

* 3.11 を体験した子どもたちが大人になって、語り継いでいく時代が来ている。

それによって少しでも、防災意識に変化が起きる事を期待したい。

●大川小学校は、地域のモデル校として斬新な校舎が出来ていた。だが、過去にあった津波(チリ地震など)の経験者がいなかったのも、それが活かせなかったのでは？(D サロン)

- 「防災はハッピーエンドに（恐怖から希望へ）」という言葉が印象に残った。（D サロン）

< 鷲山氏講演（C サロン） >

「教訓を生かした」防災まちづくりはかなり実現できる。法的整備で全国標準に

- 素晴らしい講演ですが、具体的な行動がイメージできない。（A サロン）

—小学校の校長へのアプローチ、自治会長へのアプローチ

- 「災害を克服できる防災まちづくり・防災教育」の未来像を考える（C サロン）

- * 改めて佐藤さんの話を聞いて、自分の実践は方向性としてよかったと思う。
- * 何度も大川小学校に行っている。裏山に登れる。事前に学校と地域で話し合っておけば救えた命。
- * 太尾小は、水害の問題もある。浸水地域だが、ハザードマップ、地区防災計画が必要。太尾小もこれから考えたい。
- * 日野川でも氾濫が起きている。風水害のリスクは身近に迫っている。
- * 日赤の仕事をしているが、鶴見区、緑区、都筑区等はかなり進んでいるが神奈川区は活動が少ない。区によって力の入れ方の温度差がある。
- * 横浜市の避難所は地震対応の場所。拠点は遠いので自治会館にしたいと行政に進言しているが考えてもらえない。全体のコミュニティが必要。
- * 避難所の対応は風雨、地震で違う。地域で手上げ方式で避難所を作っていく必要があるのではと思っている。
- * 避難所の運営。開錠の確認。子供の引き取り方法の確認。地域との連携。が特に大切。
- * 子どもたち・保護者・地域・行政・学校・企業とかの連携が必要。
- * 地区防災計画があるが→教育委員会との連携も必要。
- * 「防災塾・だるま」として、「地区防災計画」という理念の理解と推進への取り組みが必要。C サロンの皆様と具体的に検討し、提案していきたい。

< 全体運営関係 >

- 佐藤講師の資料があれば話し合いの中でみんなの意見がもっと深く話し合えたと思います。（C サロン）
- 講演要旨をあらかじめ配布して欲しい（それによって参加を判断することもあるだろう）（D サロン）
- 佐藤講師からの問題提起（教育体制や裁判等）の時間をもっと取って欲しかった。（D サロン）
 - 鷲山先生の話は別の機会にやれただろう（あの30分はもったいない）。
 - 談義の会のチラシを見た人は、佐藤講師の話がメインと思ったはず。
- 佐藤先生のお話をもっとじっくり伺えるとよかった。（C サロン）
- 時間が足りない（A サロン）

以 上

日時： 2021年7月27日（火） 13:15～13:45

会場：横浜市青少年研修センター 第1研修室

会場参加：足立、池田、磯野、荏本、大西、荻原、佐々木、高松、田中晃、田中喜世美、中島、早川、樋口、藤崎、増田、山田、山口、鷺山、渡辺（非会員） 18名

Zoom参加：江上健、江上富美子、釜石、小林、佐藤講師、柴田、田中栄治 7名

1 HPのブラッシュアップについて

本年度方針に基づき、会員や来訪（閲覧）者にとってわかりやすいものに改良して発信する。

「防災塾だるま通信（隔月発行、鷺山担当）」「名誉塾長の部屋（荏本先生）」「塾長メッセージ」を掲載し、

TOP ページ（最新情報）で連絡。

2 サロン運営とHP活用について

各サロンのページを作成する 構成は検討する アクションプランがトップページ

サロンの成果が反映されるように。 サロン同士の統合を図るHP構成とする。

書式を決めて、「自助・共助・公助統合」に向かうようにしたい！だるまとして発信できるものになりたい！

連携と参画を肝に銘じて、進んで行きましょう。

3 第13回通常総会で使用した議案書の修正確認 【規約確定】→防災塾・だるま通信6月号にも掲載済

4 「防災塾・だるま主催事業」共有化の手順についてのガイドライン 【理事会で確認された】

新たな事業実施と実行委員会の設置に新たについては、年間活動方針に準拠していることを前提とし、企画書（実施計画）は事前に塾長に相談の上、可能な限り二ヶ月以上前の理事会に提出し、定例会で承認を得るものとする。

5 今後の記録のつくり方について（受け身の受講からアクティブラーニング的受講に）

参加者は、談義の会受講後、各サロンで、当日の講義を受けての「感想・考察」をお話してください。

その上でサロンの本題に入っていく。

→各班記録係がまとめて、田中晃理事に集約する→講師からの要旨・代表スライドに反映

6 7月27日(火) 13:15～16:45

横浜市青少年育成センター 第1研修室

13:15～13:45 定例会

14:00～15:30 第182回防災まちづくり談議の会「Zoom オンライン」

「災害を克服できる防災まちづくり・防災教育」の未来像を考える

ゲスト講師：佐藤敏郎氏

ホスト講師：鷺山龍太郎塾長

コーディネーター：荏本孝久 名誉塾長

15:45～16:45 :各防災サロン活動

7 大学との連携研修（コーディネーター講座）；

三日間 Zoom のみ 参加費4000円（別紙計画を大学に提出）

会員も積極的な参加と参加者の勧誘をお願いします。

8 今後の予定（年間活動計画で共有していきたい）

8月理事会 8月19日（木）14：00～16：00 Zoom会議 今後は、第三木曜日とする（隔月）。

8月20日 10:00～：神奈川大学 851 室片付け（協力者募集） 連絡は池田さん/早川さんまで

9月定例会・談義の会・サロン 9月17日（金）13：15～16：45 談義の会：Aサロン主催

「震度6強の首都直下地震に備えるための耐震化推進」 講師：防災塾・だるま副塾長 田中栄治氏
横浜市青少年育成センター

10月17日：北綱島小学校視察

10月24日 13:00～16:30 J-DAG 見学 相模原市民会館第2大会議室

現在7名参加希望（大西、高松、田中晃、田中栄治、田中喜世美、早川、山田）

→この他、参加を希望される方は、小嶋さんまで連絡ください。

9. 荏本名誉塾長から： コンパクトな風通しの良い会議にしてほしい。

樋口誠

＜Bサロンの報告＞共助の防災力向上を目指すサロン

出席者：磯野、稲垣、荻原、早川、増田、山田(美) 欠席(松原)

(今回 Zoom 参加者なし)

【Bサロンの活動進捗状況とこれからの取りくみ予定】

●新しいメンバーとして荻原洋聡さん 加入

○自分の地域の災害リスクを踏まえた『地震・津波・土砂災害』の
マイタイムラインを自由に作成して持ち寄り検討。

Bサロンとしての共通した「マイタイムライン」書き込みをしていける
書式を開発していく。地域の住民や自治会に提案して提出。書いてもらった
マイタイムラインについて分析、改良して地域に実際に役立つものにする。

○Bサロン担当：11月26日(金)の談義の会は「被災者0を目指す、自助・
共助、公助との連携」をテーマに北綱島小学校防災拠点運営員会垣中副会長
を講師に企画しているが共助の有り方にポイントをおき、Bサロンとしての
研究成果も発表できるようにしたい。

C:「公助連携力向上」サロンメモ (3)

◆日 時：2021年7月27日(金) 15:45～16:30

◆会場：新型コロナウイルス感染症の影響により、横浜市青少年育成センター
第二研修室(会場)及びオンライン方式との併用開催

Cサロンのメンバー紹介等

◎鷲山龍太郎、高松清美、山口章、太西正男(新)、田中(喜)

オンライン参加 江上健、江上富美子

今回から新メンバー参加、太西氏 自己紹介 (記録は田中)

「災害を克服できる防災まちづくり・防災教育」の未来像を考える

- * 改めて佐藤さんの話を聞いて、自分の考えていることが間違っていなかった。
- * 太尾小は、水害の問題もある。浸水地域だが、ハザードマップ、地区防災計画が必要。
- * 太尾小も水害の地区防災計画を考えたい。
- * 上大岡の方も浸水地域。
- * 区によって力の入れ方の温度差がある。
- * 横浜市の避難所は地震対応の場所。拠点は遠いので自治会館にしたいと行政に進言しているが考えてもらえない。
- * 避難所の対応は風雨、地震で違う。地域で手上げ方式で避難所を作っていく必要があるのではと
思っている。
- * 避難所の運営。開錠の確認。子供の引き取り方法の確認。地域との連携。
- * 全体のコミュニティが必要。
- * 子供たちに防災の話をしているので行政に話をして協力を求めても協力頂けない。
- * 「防災塾・だるま」として、「地区防災計画」という理念の理解と推進への取り組みが必要。Cサロンの
皆様と具体的に検討し、提案していきたい。

D サロン「時事防災サロン」

日時：2021年7月27日（火）15:45～16:45

会場：横浜市青少年センター第一研修室（今回 Zoom 参加者なし）

出席者：池田、佐々木、中島、樋口（D サロンリーダー）、半田（非会員、談義の会に参加して頂いた）

閲覧資料：D サロン取り扱いテーマについて（6月25日D グループメール）

D サロンの取組テーマ（進め方）

* 鶴見川に対しては未だ不完全ではあるが、源流部から河口部までを一つの流域と捉え、様々な取り組み（水マスタープラン）がなされている（現在進行形）。

* テーマはSDGsに立ち返って選ぶべき。

* 現在起きている気象現象がいかにも異常かを再認識し、「気象情報の見方・活かし方」を知ることが必要ではないか：現象（相手）を知らなければ、対処のしようがない。

→気象台に行って、情報収集。または気象台の人に来て話してもらったらどうか。

A サロンは、談義の会に対する意見交換が活発に行われた結果、今後の取組みを話し合う時間が取れなかった。その分を日常的な、Zoomによる情報交換でカバーしていく。

以上 集約 田中晃

- ◆日時： 令和3年(2021)6月5日(水) 10:00~16:30
- ◆場所： 横浜市緑区白山地区(見学会)、みどりーむ(勉強会)
- ◆参加： 合計25名(午前19名、午後17名)

地域別内訳：横浜市緑区14名(内、白山7名)・緑区外(横浜市)5名・横浜市外6名

1. 概要

(1) 背景

平成26年(2014)10月6日午前10時30分、台風18号による大雨で、横浜市緑区白山で、高さ22mの崖が崩れ、アパート1階の室内(窓側)にいた30歳の会社員が土砂に直撃され亡くなった。

この災害には、開発業者の責任・行政の監督責任、避難指示発令の遅れ、避難所運営等様々な課題があり、関心の高いテーマだったので、地元の「まちづくりネットワーク緑」で検討を始めた。さらに、どこでも発生する土砂災害でもあり、災害の安全安心について検証するための確認として、自治会長、防災専門家や防災塾・だるまの皆さまへ声かけを行い、勉強会が成立した。

(2) 全体の進行

午前の部：当地区の鎮守である白山神社(緑区遺産の碑がある。

関東大震災で荒廃、地域で再興)を調査後、白山自治会館を訪問し、被災された地区の当時の白山自治会長(三田さん)から避難状況の説明を受けた。その後、災害現場と地域の状況を調査した。

午後の部：みどりーむで被災者への黙とう後、「防災塾・だるま」の

鷲山塾長と荏本教授・杉原氏の挨拶をいただき、活発な意見交換

が行なわれた。最後に「まちづくりネットワーク緑」の樋口代表の音頭で「よこはま地震防災市民憲章」を唱和して終了した。



左端の建物1階に土砂侵入

2. 崖崩れの状況と原因 (横浜市の見解要旨 右図参照)

(1) 崖崩れの発生状況

前日から降り続いた雨で、崖崩れが発生しやすい状況になっていた。盛土B3の道路排水や雨水が集中し、地下水位が高くなったことから、盛り土の北側が1回目の崩壊、間を置かず南側が削りとられ、続いて2回目の崩壊が発生したものと推定された。

なお、盛り土の量は、合計8800m³崩壊土砂4300m³、残留盛土4500m³、と推定される。

(2) 崖崩れが発生した3つの原因

- ① 時間当り45mm・継続雨量300mmに達する記録的豪雨
- ② 大雨による多量の地下水が集中し、盛り土の崩壊を誘発
- ③ 地山上の盛り土が崩壊

参照：「台風18号による崖崩れの対応について(横浜市

「建築局発表資料)」 <https://www.city.yokohama.lg.jp/shikai/kiroku/katsudo/h...>

<事故の発生経過と対応崖崩れの現場の経過> 関係資料より

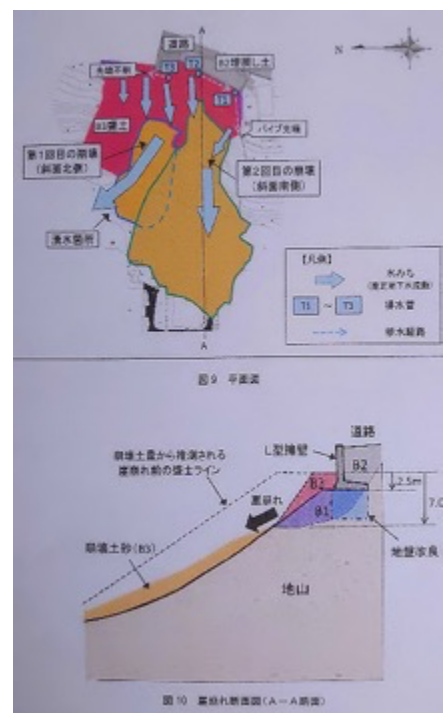


図10 崖崩れ現場図(A-A断面)

時系列の動き		備考
平成 12 年(2009) 平成 13 年(2010)3 月 9 日	崖の中腹部分に住宅造成計画 危険区域のため建築は許可されず	近隣住民からの通報による 宅地造成等規制法違反
平成 26 年(2014) 10 月 5 日 18 時 27 分 10 月 6 日 8 時 10 分 10 時 30 分 12 時 00 分 13 時 39 分 23 時ごろ	台風 18 号 大雨 (土砂災害) 警報 土砂災害警報発令 横浜市北部 崖崩れ発生 応急仮設工事 避難勧告通達 上山小学校に避難 緑区白山連合自治会長宛に FAX 捜索隊により被害者みつかる	災害対策基本法に準じて実施 避難勧告は出されていない 横浜市で崖崩れ 108 件発生 7 世帯 21 人(がけ地上下) 自治会・防災拠点への連絡なし
10 月 7 日 19 時 00 分 20 時 11 分 10 月 9 日 19 時 00 分 10 月 10 日～11 日 12 月 17 日～翌年 8 月	避難勧告一部解除 除く避難か所 同自治会への FAX 通達 現地説明会 その後 2 回 ブルーシート掛け、竹伐採等 行政代執行工事	避難は 10 月 17 日まで継続 台風 19 号対応、鴨居中に避難 仮設排水経路確保 土砂搬出、斜面保護、排水施設

3. 土砂災害現場の調査

(1) 避難状況

急なお願いだったが当時の白山自治会長から説明を受けた。

- ・ 台風 18 号で崖崩れが発生、男性が亡くなられた。
- ・ 地元消防団も救出に出動し、自治会は後方支援を行った。
- ・ 避難勧告では、隣町の上山小学校への避難が指示され、住民が移動した。(通常の避難所は鴨居中学校)
- ・ 白山自治会では、車両を手配して上山小学校にいた避難者を白山自治会館に連れ戻し、受け入れることを区役所に連絡した。避難は 10 月 17 日まで継続した。
- ・ 要援護者は自治会、鴨居ケアプラザ、民生委員が連携し施設へ受け入れるようお願いした。
- ・ 家庭防災員や近所のお手伝いにより炊き出しが行われた。白山自治会から区役所に寝具と食料の提供を要請した。
- ・ 避難者は白山自治会館が 5 世帯 18 名、白山みどり自治会館が 2 世帯 3 名だった。



(2) 避難現場の今

- ・ この崖地に住宅を建てる予定であったが、許可されなかった。
- ・ 被害のあったアパートは撤去され更地になっていた。
- ・ がけ部はコンクリート構造物で固められていた。
- ・ なお、下流下水の水量から見て、がけから出る水量は相当多そうだ。



(3) 現地調査

- ・ 駐車場から崖崩れ箇所を視察した。
- ・ アパートの持ち主から、大勢で現地を見ていることに不快感が示された。三田前白山自治会長

が説明し了解を得た。(イベントの前に現状確認しておいたほうが良かった。)

4. 勉強会での主な意見

(1) 不法造成地で、建設は中断されたが、放置されていた。

- ・「宅地造成等規制法違反」の土地であり、行政の指導で「造成の解除処置」を取るか、処置できないなら「台風襲来以前に避難勧告」を出し、避難してもらわなければならない。
- ・この対応のポイントを絞って対応しておけばよかった。

(2) 連絡の混乱により、関係者の対応が遅れた。

- ・台風 18 号接近で土砂災害警報が横浜市北部に発令された。
- ・崖崩れ発生後に避難勧告が通達された。早めの勧告があれば避難できたのではないか。
- ・自治会への連絡は事故発生後であり、対応が後手後手となった。
- ・避難先は近隣の上山小学校が指示され住民が避難した。本来の避難先である鴨居中学校地域防災拠点に災害発生報告や説明がなかった。
- ・そこで、自治会長の判断で地元の自治会館を避難所とし、車両で移動、避難生活を開始した。
- ・被災か所の上(白山みどり)と下(白山)の地域は別の自治会で、それぞれの自治会館に避難する分かりにくい対応になった。

(3) 行政と地域の連携関係

- ・住宅造成計画に対する近隣住民の反対で、建設計画が許可されなかった。
- ・自治会や防災拠点への説明・情報伝達・意見交換がなかった。
- ・行政が絡むものは、キッカケ作りをして味方にするすることで、相談を受けられるようになった。
- ・要支援者名簿の義務付けもされ、より連携が大事になっている。
- ・トップの人材が大切、同じ目線で支え合う関係が大切だ。

(4) 現地の地盤の特徴

- ・古い盛土の上に新しく盛土され、滑りやすくなっていた。
- ・広島県等の崖地の開発で土砂災害が起きている。熊本県でも新築家屋が崩れており、地盤が関係する。過去の災害を調べておくことだ。
- ・横浜市では氷河時代にたまった泥と元の地形が持ち上がり、やわらかい層があることを認識すべきだ。地質の調査では長周期の微振動が多く見られ、地震での影響を受けやすい。
- ・防災科研から借りた地震計を置いて観測している参加者がいた。



(5) 地域の防災知識の普及

- ・避難情報の取り扱い等防災への関心を持ってもらう防災教育をどう徹底するか。
- ・防災士や SL (セーフティーリーダー) が行政と協働する時代になっている。市民の力が大切だ。
- ・配布マップを基に現地を見ておくことだ。現場に危険が潜んでいる。

- ・支援学校での経験では、多様な関係者がおり、課題を整理し、目標を決め評価している。
- ・避難所や祭りで参加した子どもを中心にネットワークを作り防災の大切さを教えている。

(6) 個人としての対応

- ・被災者本人は寝ていたなので、死ぬとは思わなかっただろう。
- ・マップを見て危険な場所に住んでいることを知る努力も必要である。
- ・勤務（夜勤）明けで、土砂災害警報の発令に対応できなかった。

5. まとめ

(1)課題

- ・人が死なない防災とするため、リスクに自ら気付いて共有できるコミュニティーを作っていく。
- ・現場の状況を把握し、話し合い、問題を絞っておくこと。現場目線でまとめ対応すべきだ。
- ・目標が決まれば、アクションプランをつくり、さらに、地域防災計画に織り込んでおくこと。
 - ・横浜の地盤が弱いことが分かった。これを前提とした防災活動をすべきだ。
- ・避難所の選択も身近な自治会館や小中学校等多様な施設があり、活用の仕方にも取組みたい。
- ・今回のテーマは小さな疑問から始まり、調べると資料が沢山出てきた。さらに規模を拡大して専門家に興味を持ってもらい、多くの方たちの知見を得ることができ、多面的に学習できました。

(2)最後に

- ・地域の災害でしたが、この様な災害はどこでも起こり得ることであり、今回の教訓を活かして防災・減災に取り組んでいきたい。事故もなくスムーズで、この場を借りてお礼を申し上げます。



・白山神社の碑 = 緑区遺産（登録 004 号）・・・「まちネット」の提案で実現した。 関東大震災で荒廃した神社を 10 余年後に地域の協力で復興したこと

実行委員会メンバー6人

池田（企画）、田中（晃 記

へ

* 添付資料：チラシ

* 当日の配布資料

- ① 次第とチラシ(田中喜世美氏作成) ②事故発生と発掘現場 ③台風 18 号による崖崩れの対応について(横浜市発表資料) ④横浜市緑区白山で発生した土砂災害(メモ) ⑤平成 26 年台風第 18 号に伴う被害状況 ⑥緑区白山四丁目の宅地造成等規制法違反の代執行工事終了 ⑦横浜市・緑区の台風崖崩れ、遺族の請求棄却 地裁判決 ⑧関東平野の変遷、地形区分ほか(荏本氏提供) ⑨その他資料

第2回「新しい研究の発見と進路の決定」

名誉塾長 荏本孝久

前回はスタートということで防災研究に携わってきた思い出話しを紹介して行こうと考え、「まずは、私の生き立ちの一端から始めます。」として文章を書かせて頂きました。今回からは、もう少し具体的な防災に関わる自分の経験と歩みについて書き始めたいと思います。

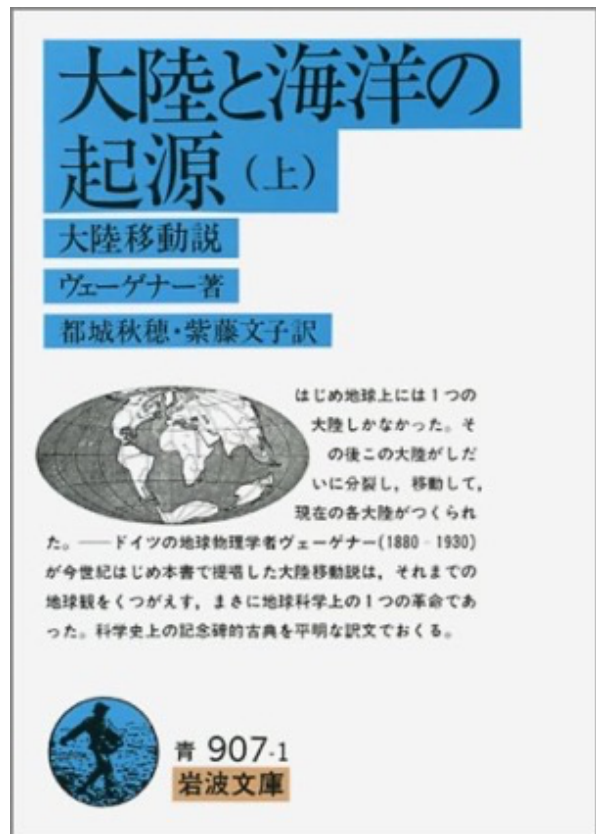
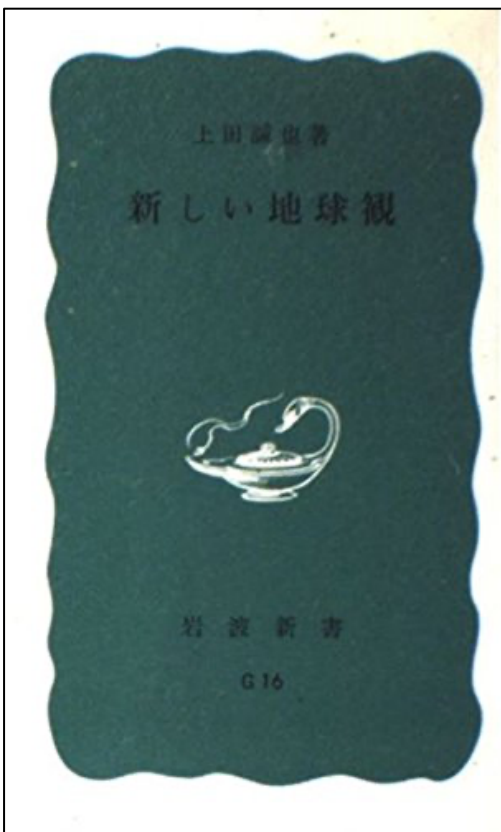
私は昭和49年(1974)に東京都立大学工学部を卒業し、そのまま大学院へ進みました。丁度オイルショックが起きて大混乱が始まる前年でした。大学生の4年間はワンダーフォーゲル部に所属して、勉強もまともにせず仲間と一緒に全国各地の野山に出掛け自然と触れ合うことを楽しんでいました。従って、いざ卒業するとなると卒業研究と言う研究の一端を経験して、もう少し勉強して専門の知識を身につけてから職を探しても遅くはないと考え、両親の許可をもらい我儘を通してもらいました。

専門は、入学時から土木工学を志望しておりました。なぜ土木工学かというと、当時石原裕次郎という人気俳優が主演した2本の映画で黒沢明監督の「超高層の曙」と「黒部の太陽」という建築・土木関係の映画が公開されて、どちらも大変厳しい建設現場を舞台に人間味溢れるタッチで構造物が完成していく過程が描かれつつ物語が進展して行きました。「超高層の曙」は地震国日本での最初の超高層建物となった霞ヶ関ビル、「黒部の太陽」は北アルプスの山奥槍ヶ岳から流れ出る黒部川に建設されたアーチ式黒四ダム建設にまつわる映画でした。いずれも当時の建設技術の粋を集め、将来の日本の針路を予想させるものでした。この影響で土木工学に興味を持ち進学することになりました。当時、土木工学は経験工学だと言われ設計用の公式の多くも経験から導かれた計算式を覚えて構造物を設計することが行われていました。勿論、応用力学や水理学、土質力学など歴史的に完成された理論もあって、苦勞したことも多くありました。ところで我が国では土木工学と建築工学という2つの分野は別々に工学部に学科がありますが、外国では土木・建築の構造物は構造工学として工学部にありますが建築学は主にデザインを学ぶ学科として芸術学部などに属しています。日本では古くから地震が多く、多くの構造物が被害を受けてきた経緯があり、特に建築物は倒壊等の被害を受けると直接的被害に結びつき、また大規模な火災に至って被害規模を著しく大きくする可能性があつて、特別に建築物のことを研究する必要性があつたので、土木構造物とは別の学問として発展してきたのかも知れません。いずれにしても我が国ならではの特徴を考えた結果ではないかと思っています。

その頃には、昭和39年(1964)東京オリンピックも終わり新幹線網や高速道路網の普及により経済成長が著しく拡大して、世界の先進国へと突き進む中、超高層建物、首都高速道路網、鉄道運輸網、物流道路網など巨大な都市のインフラ整備が大きな課題となっていました。また同時に大きな活力を感じていました。ですが私は土木工学科に入学して最もビックリしたことは、大量に発生する生活ゴミ、汚水や尿尿処理の問題が都市生活を維持する上で最大の問題となっていることを聞いたことでした。人口が増えて都市が発展することは諸手を挙げて喜ばしいことではなく、都市を上手く管理する技術が必要では無いかと考えたこともありました。そういった中で、技術の発展と共に急速にコンピュータの利用が普及してきました。どの分野でもコンピュータが無いと設計・施工・管理など重要な仕事が進められないほどコンピュータ利用の比重が増大して来ました。自分が関連した分野では、それまでは中々理解できなかった地盤や構造物の動的な振動現象をコンピュータを使って時間とともに変化する現象を解析的に明らかにできるということになり、大変興味をもち新しい分野であった耐震工学の分野の研究を始めました。ほぼ時を同じくして、それまで余り明確でなかった地震現象がプレートテクトニクスという考え方の基、地球規模で統一的に理解できるという画期的な理論が普及してきて、地震も断層理論で解析的に理解できる道が開けてきていました。それまで、地震の発生理論や震源のイメージなどは不明確で、断層は地震発生の原因ではなくて、飽くまでも地震発生後に現れるズレであるとの説明がなされていました。震源が断層面のように広がりをもった破壊現象とは考えられていなかったのですが、プレー

トテクトニクス理論の普及により地震現象に関する理解が一変してしまいました。その当時は、このようなコンピュータによる耐震解析技術と地震の断層理論に夢中になり、文献や参考書や単行本を貪るように読み漁りました。上田誠也「新しい地球観」、竹内均・上田誠也著「地球の科学—大陸は移動する」、アルフレート・ヴェーゲナー著「大陸と海洋の起源」、竹内均著「地震の科学」や平朝彦著「日本列島の誕生」、石橋克彦著「大地動乱の時代」など時間を忘れて読んでいたことを思い出します。自分事になりますが、卒業研究は「井筒基礎橋脚の非線形挙動に関する研究」、修士論文は「単純系の非線形振動に関する実験的研究」、そして大学院を終了して民間企業で働いた後、大学に助手として就職してからまとめた博士論文は「断層震源モデルに基づいて合理的に設定した設計用人工地震波に関する基礎的研究」でした。研究の内容もコンピュータの利用と地震現象の理解により大きく変わって行ったように思います。兎に角当時は、耐震工学は始まったばかりの分野で、私にとっては何もかも新鮮で興味を引く内容が沢山あって、気持ちも高揚し充実した時期であったように思います。

今回の話は、この辺で終わりにしたいと思います。次回からは、防災研究への重要性の認識について進めて行きたいと思います。



夢中になって読んだ本（左「新しい地球観」、右「大陸と海洋の起源」）

主催「防災塾・だるま」

「第183回 防災まちづくり談義の会」

(要申込下記参照) 会場参加・ZOOM オンライン **参加者募集**

2021年9月17日(金) 14:00~15:30 (談義オンライン入室 13:45~)

会 場：横浜市青少年育成センター第二研修室 (関内ホール地下2階)

住 所：横浜市中区住吉町 4-42-1・・・**下記の案内図を参照**

「震度6強の首都直下地震に備えるための耐震化推進

～耐震化の現状と課題、共助による推進策の提案～

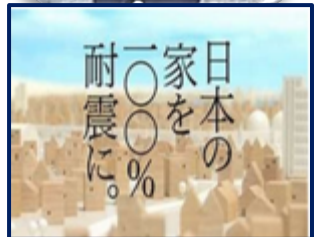
講師：田中 栄治氏 防災塾・だるま 副塾長 Aサロン代表



年々リスクが高まってきた首都直下地震に備え、行政は耐震化促進の制度を設け、旧耐震基準の建物に住んでいる方々や賃貸アパートの大家さんに対して広く働きかけてきました。しかし、制度の利用の仕方がわからない、現在の住いで特に問題はない、耐震診断しても改修費用が心配等の理由から地域で推進することが困難です。


どうすれば大切な家族や財産、自分自身の命を守り、被害を最小限にできるでしょうか。

今回は、自治会などの地域組織が、旧耐震基準の建物の持ち主の思いを聞きながら、耐震化を進める方法について提案いたします。



- ◆ 13:15~13:45 定例会
- ◆ 14:00~15:30 防災まちづくり談義の会
「震度6強の首都直下地震に備える耐震化推進」
アドバイザー 名誉塾長 佐本 孝久氏
コーディネーター 塾長 鷲山 龍太郎氏
- ◆ 15:45~16:45 防災サロン 分科会



- ★公開講座: 現地参加は先着30名(要申込) リモート参加は100名まで可。
 - ★参加費: 無料(要印刷資料代100円)
 - ★会 場: 横浜市青少年育成センター第二研修室他(関内ホール 地下2階)
JR根岸線「関内駅」下車徒歩7分 横浜市営地下鉄(ブルーライン)
「関内駅」下車徒歩5分 みなとみらい線「馬車道」下車徒歩5分
 - ★参加申込受付: 防災塾・だるまHP申込サイトまたは下のGoogleフォームから
 (アドレス <https://forms.gle/ZQXd1NckW4Dp7Zza8>)
- 主催「防災塾・だるま」HP <http://darumajin.sakura.ne.jp>



次回: 11月24日(金) 14:00~15:30 「被災者0を目指す、自助、共助、公助、医療との連携について」
講師: 北綱島小学校地域防災拠点運営委員会 副会長 垣中 祐二氏 申込: Googleフォームから

9月17日「防災塾・だるま」定例会協議事項(要旨)

「防災塾・だるま」2021年8月19日理事会から
要約 塾長(代表理事)鷲山龍太郎

1 HPの更新と運営について

- 新しいHPの再構築を進めています。
- 会員からの「新しい情報」の掲載について。
 - ・会員からだるまHPから情報提供してほしい防災イベント等ありましたら、役員までお知らせください。
 - ・「防災塾・だるま」紹介してよいかを役員会で共有し、塾長決済でHP担当から公開します。
- 会員にとっても次の予定がわかりやすいHPに
 - ・次回「防災まちづくり談義の会」のチラシ画像をトップページは配置します。
 - ・会員にだるまの活動、方針、レポート等をHPの深層を辿らなくても目にできるように「通信」にある程度まとめてPDFでHPから共有できるようにします。
 - ・年間活動計画をHPにリンクします。カレンダーも便利ですが、年間計画が一目でわかるようにします。
 - ・年間活動計画は変更されていきますので、ご確認ください。

2 7月27日の「防災まちづくり談義の会」

- 東日本大震災10年にふさわしい、大変有意義な講演会だったと思います。
 - ・通信にある、塾長挨拶、要旨、各サロンでの感想のまとめ、レポートをご参照ください。
 - ・「聞いておしまい」ではなく、一步一步「知の共有」と「対策への考察」をだるまとして前進できることを目指したいと思います。
- 講演会の資料、要旨については理事会として今回議論を深めました。
 - ・会員が「談義の会」のその日の論点を理解した上で参加できるよう、事前に要旨または、代表的なスライド数枚を講師に提供していただくように依頼します。
 - ・会員の皆さんも、ぜひ、その日の論点を把握するようにしていただき、サロンでも協議を深めてください。

3 今後の予定

- 第183回談義の会9月17「防災まちづくり談義の会」 チラシリンクの通り
http://darumajin.sakura.ne.jp/30dangi/dangi2021/183dangi_leaf20210917.pdf
- 第184回談義の会等(B サロン主催) 11月26日(金)13:15~16:45 横浜市青少年育成センター
13:15~13:45 定例会
 - 第1部 14:00~15:30 第182回防災まちづくり談義の会
講師 北綱島小学校地域防災拠点運営委員会 副会長 垣中 祐二 氏
 - 第2部 15:45 ~16:45 :各防災サロン活動
 - ★C サロン、Aサロンの談義の会に関連するものとして、協議を深めたいです。
- 荏本孝久先生記念講演(12月17日予定)等について、有志による実行委員会で立案中。
- 2021年度後半のコーディネーター養成講座の開催申し込みについて
 - ・KU ポートスクエア or 横浜キャンパスまたは(Zoom オンライン講座) 大学パンフができ次第ご案内します。
 - ・会員の皆様も奮ってご参加ください。
- 「熱海土砂災害」は「白山の土砂災害」との行政と市民との連携等類似点を感じます。行政(学校含む)との連携や地区の共通理解の問題は、大川小学校の事案とも共通点があります。
 - 自助・共助・公助連携そして気候変動問題等の課題にだるまとしても、向き合っていきたいところです。
- 名誉塾長の部屋第二回「研究を始めた経緯と方向性、進路」掲載。 荏本先生ありがとうございます。
8月19日議事録 <http://darumajin.sakura.ne.jp/senyou/61yakuinkai/yakuinkai2021/rjikai20210819.pdf>